

論 文 要 旨

鹿児島大学

Associations Between Depressive Symptoms and Satisfaction with Meaningful Activities in Community-Dwelling Japanese Older Adults

氏 名 丸田 道雄

【はじめに】

抑うつ症状は、地域在住高齢者に多くみられ、様々な健康関連のアウトカムに悪影響を及ぼす。先行研究は、身体的・認知的・社会的活動といった様々な活動への参加が抑うつ症状へ良い影響を与えることやその効果が性別で異なる可能性を示している。しかしながら、個人や文脈によりその活動の重要性は異なり、先行研究ではその点が十分に考慮されていない。本研究では、活動を介した地域在住高齢者の精神的健康維持・増進への示唆を得ることを目的として、高齢者が現在の生活の中で重要とする活動（重要な活動）について、性別での特徴および活動への満足度と抑うつ症状との関連を検討した。

【方法】

解析対象は、鹿児島県垂水市における垂水研究2018に参加した地域在住高齢者806名（平均年齢74.9±6.3歳、女性64.3%）であった。認知症の既往のある者や向精神薬を服用している者、主要データの欠損者は除外した。重要な活動の調査には、作業選択意思決定支援ソフト（Aid for Decision-Making in Occupation Choice）を用い、活動への満足度と遂行度を5段階と10段階で評価した。抑うつ症状は、Geriatric Depression Scale-15により評価し、5点以上を抑うつ症状ありとした。抑うつ症状の有無と基本情報、身体機能および認知機能低下の有無、社会参加状況との関連について、 χ^2 検定、対応のない検定、Mann-WhitneyのU検定を用いて比較した。抑うつ症状の有無による重要な活動の性別での特徴についてはフィッシャーの正確確率検定を用い、ロジスティック回帰分析により抑うつ症状と満足度および遂行度との関連を性別で解析した（調整変数：年齢、性別、BMI、教育歴、服薬数、認知機能、身体機能、居住形態、社会参加）。統計解析は、SPSS ver.25.0を使用し、有意水準は5%未満とした。なお、本研究は、鹿児島大学疫学研究等倫理委員会の承認（170351疫）を得ており、研究参加者には書面にて同意を得ている。

【結果】

抑うつ症状の有症率は15.8%（127名）であった。抑うつ群は、非抑うつ群よりも高齢（ $p = 0.010$ ）で、活動への満足度（ $p < 0.001$ ）と遂行度（ $p = 0.005$ ）が低く、身体機能の低下（ $p < 0.001$ ）があり、服薬数（ $p = 0.022$ ）が多く、低い社会参加（ $p < 0.001$ ）であった。重要な活動のカテゴリについて、男性では余暇（抑うつ群34.0%、非抑うつ群30.3%）、対人交流（抑うつ群6.4%、非抑うつ群19.5%）、スポーツ（抑うつ群12.8%、非抑うつ群12.7%）を選択した者が多く、女性では家庭生活（抑うつ群30.0%、非抑うつ群21.3%）、対人交流（抑うつ群21.3%、非抑うつ群19.9%）、余暇活動（抑うつ群20.0%、非抑うつ群19.2%）を選択した者が多かったが、男女ともに有意な差はなかった（男性； $p = 0.120$ 、女性； $p = 0.088$ ）。ロジスティック回帰分析の結果、重要な活動の満足度は、男性（OR 0.52、95%CI 0.30-0.77）と女性（OR 0.67、95%CI 0.49-0.91）の両方で抑うつ症状に関連していたが、遂行度は女性（OR 0.87、95% CI 0.77-0.99）のみ関連していた。

【結論】

本研究では、地域在住高齢者において、抑うつ症状のある者とそうでない者では、重要な活動の特徴に男女ともに差がないことが示唆された。また、重要な活動の満足度は男女ともに抑うつ症状に関連していた。つまり、抑うつ症状は、重要な活動のカテゴリに関わらず、その活動の満足度に関連していることが示唆された。地域在住高齢者への活動を介したアプローチには、その重要性や満足度を考慮した支援が重要と考えられた。